

今回岩手県遠野市・陸前高田市周辺を訪れ二つのテーマを立て研修を行った。一つ目はこれまで講義を通して住みやすい環境、まちづくりを学び考えてきたがその中に人以外の生物を関与させることによる影響について学ぶこととした。岩手県遠野市では馬搬という伝統技法が残っており、馬と人の暮らしを調査した。二つ目は震災学習とした。東日本大震災により甚大な被害を受けた陸前高田市を中心に被害の様子や復興の過程を学ぶこととした。

1. 馬と地域

馬搬とは馬を用いて切り倒した木を山から運ぶ林業の運搬方法の一つである。馬搬は昭和中期まで主流とされていたが、ブルドーザーなど重機の普及によって衰退していき地域によっては担い手が途絶えてしまう事態となった。しかしながら馬搬におけるメリットは多くこれからの社会に必要なものであろう。馬搬におけるメリットは大きく分け三つある。まず一つは生物である馬を使用するため小回りが利くことである。機械を使った運搬方法では機会が通れるほどの舗装された道が必要となり伐採できる箇所が限られてしまうが、馬搬であれば馬と運搬する木の通れる幅さえ確保すれば良い。もう一つは環境にやさしい手法ということである。機械での作業においては機械から排出される二酸化炭素や、作業による騒音が考えられるが馬での作業であれば比較的静かに作業をすすめることができ、二酸化炭素の排出もなく使用するエネルギーの削減にも繋がる。地球温暖化などが騒がれる現代においてはあるべき形なのではないか。馬搬が衰退してしまった背景には近代化とともに大量生産という結果の側面に重きが置かれがちだったこともあるだろう。世間のニーズとともに供給の形を変えていく必要があり、現代では環境に配慮した製造方法であるといったように仮定が注目されておりそのニーズに対応した形の一つとして馬搬も考えられるのではないだろうか。最後に景観の良さである。伝統的な技法としての価値もあり、機会による無機質な作業風景と比べ馬での作業は惹かれるものがある。アニマルウェルフェアの観点において馬への虐待的な部分を懸念していたが傾斜を活用した運搬方法のため馬への負担は低くこれからの林業において馬搬の復興が求められるのではないだろうか。しかし一方で馬搬だけでは立ち行かない部分もみえてきた。まず馬搬は小規模の林業の形態であるため、量や効率を考えた場合には向いていない。そして担い手の不足である。現在地域によっては途絶えてしまっていたり担い手がいても高齢化が進み後継者不足であったりと課題として挙げられる。

これらのメリットデメリットを踏まえたうえで今後の林業の一つの形として馬搬を広めていくべきだろう。もちろん完全に機械から馬に変えていくことは不可能である。しかし現在の環境問題などを踏まえるとエコな形の林業として一定数広まっていくことが望ましい。また馬搬は新たな技法ではなく、先人の知恵により燃料が無い時代から続いてきた技法である。手間や効率を求め続けた結果機械化の影響で廃れてしまったが、この時代には馬搬に

限らず古くからの手法を学びなおすことが重要ではないか。

今回の研修において岩間さんのもとで馬搬を学んだが、その中で海外に関するお話も多くいただいた。海外では日本と比較して馬搬が残っていると言える。スウェーデンやイギリスでは数千単位で馬搬の担い手が残っている。岩間さんの馬搬以外の馬に関する活動も世界中心に広まり日本国内では広まりづらい状態である。これにはいくつかの要因が考えられる。イギリスでは馬を守るための協会があり、普段から人と馬が身近な関係にある。フランスでは馬を使ってごみ収集を行う。つまり海外では日常の中に馬が溶け込んで当たり前のよう存在している。このような関係から馬のいる暮らしや馬の活用も盛んになっているのではないだろうか。馬との関係性の薄さは人にとって意識の薄れにも繋がる。日本人にとって馬は身近ではない少し特別な存在なのかもしれない。そのことから馬を取り入れた暮らしという発想には結びつきづらく、岩間さんの活動も広まりづらい。しかしこのままでは技術者は海外へ流れてしまい日本の馬搬は消滅してしまうのではないか。

馬との暮らしは林業としてだけでなく観光集客にも繋がるのではないだろうか。アニマルセラピーを組み合わせる可能性も考えられる。アニマルセラピーには科学的根拠はないもののその効果自体は認められており、馬によるホースセラピーも提供されている。実際に共同放牧場にて馬との触れ合う機会を頂いた。馬搬に使われる馬は特に大型であることから最初は不安や恐怖があったが馬と触れ合いその温かさや心拍を感じて癒しを得ることができた。この経験から馬が身近にいる暮らしは特にストレス社会と言われる現代において有効なのではないか。

2. 震災学習

2011年に起きた東日本大震災では死者と行方不明者を合わせ 25,949 人の犠牲者という関東大震災に次いで甚大な被害を受けた。その中でも陸前高田市では行方不明者を含め犠牲者数 1700 人以上人口比で 7.2%という岩手県では最大の被害を受け、津波被害を受けた世帯のほとんどが全壊に至りました。このような事態を繰り返さないためにも過去から学ぶことは多い。特に南海トラフ大地震や首都直下型地震など大地震が必ず来ると言われている今だからこそ必要であると考え、陸前高田市にある東日本大震災津波伝承館を訪れた。伝承館では被害にあった橋・車の展示、被災した当時の放送局の再現があり生々しく被災当時の状況を知ることが出来る。私はこれまで義務教育期間などに震災について学ぶことはあったが教科書の小さな写真ではよくわからなかった地震、津波による被害の壊さを体感的に学ぶことができた。これは私だけでなく多くの人に当てはまるだろう。地震だけでなく台風など災害があったとき自分は大丈夫と棚上げして野次馬になっている人はどれほどいるだろうか。二次被害やそれ以降の被害を想定して動ける人はどれほどか。展示の中に逃げ遅れた理由があり、誰かを迎えに行くことや待ったことが原因であった。奉仕精神も大事ではあるがまず自分の身を守れる環境で落ち着くまで身を置く必要がある。なぜこの負の連鎖が出来てしまうのか。原因は災害教育の中で地震であれば火災や余震に対する教育が不

足していることであり、イレギュラーに対する知識が足りていない。またこれに関して、三陸地方ではてんでばらばらに逃げろという災害に対する教訓で”津波てんでんこ”というものがある。この教訓は震災教育の中で大きな役割を果たすだろう。実際に東日本大震災のとき釜石市ではこの教訓を活かして中学生が活躍した。中学生は指定されていた避難所に「津波が来るぞ」と叫びながら向かったためその声に従い隣にあった小学校の生徒らも非難に向かうことができた。それだけでなく指定の避難所についてから油断せずその時の状況から判断しさらに高い場所への避難することができた。もしこの判断が無ければ避難者の命は無かった。この事例から教訓から自身の命を守ることを第一として最善策を見出していくことが重要であると学んだ。しかし災害時にそこまで思考するには普段からの訓練や学習が欠かせないだろう。

岩手県大船渡市・越喜来小学校は当時海からわずか 200m の低地に位置しており、避難経路に難を抱えていた。これに対し学校側は新たな避難経路を設置し避難時間を短縮することができた。新たな避難経路ができたのは 2010 年 12 月であった。防災において現状維持で今あるものの安全性を確かめるだけでなく、より良いすべを考えていくべきではないだろうか。